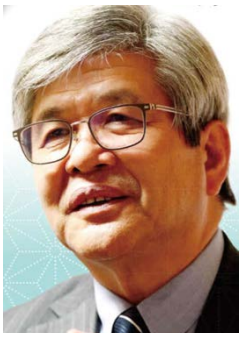
中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

NIHON BUNKA

2023 年度活動報告書

Vol.5

ごあいさつ



中部大学日本伝統文化推進プロジェクト長
辻本雅史

2023 年度の活動報告書をお届けいたします。

学生たちが、日本の優れた伝統文化に親しみ、教養豊かな国際人に育ってほしい、そうした願いを込めて、本プロジェクトは活動してきました。始動以来 5 年、この間、コロナ禍も経て、今年度は常態に復することができ、活動も軌道に乗ってきました。人と人のつながりを疎外するコロナ禍を越えることで、文化には、人間らしさを回復する力があることを、あらためて実感できたようにも思えます。

2023 年度も、観世流能楽の大家・久田勘鷗先生による「能楽鑑賞会」、日本舞踊西川流第四世家元・西川千雅先生による「日本舞踊公演会」、それに講談と落語の「伝統話芸の世界」、この 3 つは、例年通り実施できました。いずれも、本学の文化発信の大きな柱となりつつあります。なお、久田先生と西川先生は、本学客員教授として、ほかにも種々のご指導いただき、本学に貢献していただいております。

豊かな文化的教養は、学生自らが参加することで身につきます。学生の自主的な参加を期待して、企画から運営にいたるまで、学生の役割を徐々に拡大しております。そうしたなか、学生の主体的な活動を支援する本学独自の「ちゅとラボ」などにも、伝統文化を主題として挑戦する動きが出てきており、これもうれしいことです。この方向が、いずれサークルやクラブ活動などに発展していくことを、強く願っているところです。

文化性豊かな校風づくりへの貢献も、プロジェクトの大きな目的です。そのためには、学内や学園内での連携が重要です。併設校との連絡・連携は昨年度から進んでおります。大学内でもこれまで連携が密であった人文学部日本語日本文化学科のほかにも、今年度は、応用生物学部や現代教育学部との連携企画も実現できました。

12 月に「江戸期の音楽」という新企画が実現し、多数の来場者を得ました。2023 年度に本学の学位を取得された加藤いつみ氏による企画です。学術の成果が文化活動につながった点でも、大いに意義深いことと思います。なお、加藤氏は私たちのプロジェクトに賛同され、多額のご寄付をいただきました。改めてお礼申し上げます。

本プロジェクトは他に類例をみない顕著に特色のある活動だといわれております。今後とも、日本伝統文化豊かな学園づくりに努めますので、引き続きのご理解とご支援をお願いいたします。

2024 年 3 月

目次

ごあいさつ
１．能楽鑑賞会
２．日本舞踊公演会
３．伝統話芸の世界（講談・落語）
４．京文化と科学と芸術
５．江戸期の音楽
６．日本伝統文化講座
（１）春学期　授業「日本の歴史と文化」（座学）
（２）秋学期：授業「ＳＤＧｓプロジェクト科目」（お稽古）
（３）日本伝統文化講座の学生感想
７．協力事業、伝統文化関連イベント
（１）源氏物語屏風の講座（中部大学アクティブアゲインカレッジ）
（２）草木染め　ワークショップ
（３）着付け講座（日本語日本文学科）
（４）チャンバラ合戦（スポーツ大会）
（５）現代教育学部「学部間連携推進委員会」（伝統文化の教育）
１）七夕にちなんだ伝統文化事業
２）雛人形ワークショップ
３）着物の着付け体験（現代教育学部）
【活動の発展】
（６）日本伝統文化プロジェクト室の活用
１）雛祭りの遊び道具など、学生作品を展示（現代教育学部）
２）伝統文化に関わる学生活動の取材（放送研究会）
３）学生活動の成果発表「伝統玩具」展示会
（７）中部大学春日丘中学校「江戸時代の連句を巻こう」（中大連携）
（８）学生による日本伝統文化に関わる活動
８．プロジェクトメンバー
編集後記・謝辞

1. 能楽鑑賞会

解説　久田三津子（シテ方観世流　能楽師　重要無形文化財総合指定保有者）
演者　「紅葉狩」久田三津子 他

5 月 17 日（水）、三浦幸平メモリアルホールにおいて、能楽鑑賞会を開催した。参加者は計 243 名（内訳：学生 228 名、教職員 9 名、学外参加者 6 名）であった。

高貴な女性に扮した鬼女を平維茂が退治するという筋立ての「紅葉狩」が、舞囃子（笛や鼓を交えた舞）で行われた。衣装や面をつけていなくとも、徐々に激しさを増す久田三津子先生の舞と雰囲気に、学生たちは引き込まれているようであった。本年度は「紅葉狩」のほか、樗木宏成氏（大学院国際人間学研究科　博士後期課程）が「羽衣」の、武田和真氏（名古屋大学 学生）が「小鍛冶」のお稽古の成果を披露した。

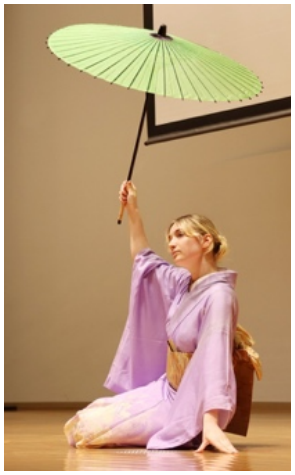
また、コロナ禍におけるソーシャル・ディスタンスが緩和されたことから、今回は鑑賞会参加者を対象にしたワークショップも開催された。参加者は能面の視界の狭さなど、滅多に触れられない貴重な体験をすることができた。鑑賞会の様子については、日本伝統文化推進プロジェクトのホームページでも配信している（2024 年 2 月時点）。

２．日本舞踊公演会

国際コミュニケーションの為の日本舞踊

講演・実演　西川千雅（日本舞踊西川流四世家元）
演者：アリエノール ブランディヌ ベネディクト マリー カトナ

7 月 12 日（水）に三浦幸平メモリアルホールにおいて日本舞踊西川流家元西川千雅先生、及び西川まさ子先生により、日本舞踊の公演会が行われた。参加者は 154 名（学生 130 名、教職員 12 名、一般 12 名）。今回は「国際コミュニケーションの為の日本舞踊」と題され、ちょうど来日していたフランス人女性による西川流の日本舞踊が披露された。日本人以上に日本の伝統文化に興味を持っているフランスの女性から、西川千雅先生は、その繊細な感覚を軽妙なトークの中で引き出していた。日本文化を十分に理解して、伝統的な西川流の日本舞踊の中に美を見いだしているフランス人女性を通して、日本文化とはいかに繊細で美しいものかという事が伝わるような公演会であった。



３. 伝統話芸の世界（講談・落語）

第１部　講談「棋士伝　八冠への道！」旭堂　鱗林
第２部　落語「尾張落語」　　登龍亭 獅篭

11 月 8 日（水）、三浦幸平メモリアルホールにおいて、「伝統話芸の世界」と題して講談と落語の公演が行われた。参加者は、学生 80 名、教職員 44 名、春日丘中学の生徒 107 名（留学生 4 名を含む）、同校教員 5 名、学外者 36 名、計 272 名であった、

第 1 部の講談は、出演交渉の段階では演目を「棋士伝　名人への道！」としていたが、10 月 11 日に藤井聡太氏が史上初の八冠全冠制覇を達成したため、公演直前に急遽「棋士伝　八冠への道！」に変更した。旭堂鱗林氏は、とんち相撲や謎かけで和やかな雰囲気になったところで本題に入り、釈台をたたく張り扇の調子に合わせ、藤井聡太氏の幼少期から、第 71 期王座戦で永瀬拓矢氏の王座を奪取するまでを、名古屋弁を織り交ぜた軽妙な語り口で披露された。

第 2 部の落語家である登龍亭獅篭氏は漫画家でもあり、藤井聡太氏を描いた似顔絵が評判になっているそうである。それにあやかるようにと、春日丘中学の男子生徒も似顔絵を描いてもらったが、その出来映えが素晴らしく、拍手が起こった。演目は「尾張落語」と題し、江戸落語の「時蕎麦」の尾張版「時きしめん」と、江戸落語の「たらちね」（上方落語では「延陽伯」）の尾張版「天むす」であった。「たらちね」は、大家の紹介で妻をもらった男と、言葉づかいがあまりにも丁寧な妻との間に起きる騒動を描くが、尾張版では、尾張から迎えた妻の言葉が通じない夫婦の話となっていた。

その後、落語の指導の時間が設けられ、登龍亭獅篭氏が参加者を募ったところ、まず春日丘中学の女子生徒が高座に上がり、彼女自身のレパートリーである「寿限無」と、登龍亭獅篭氏から教わった小咄を披露した。次に男子大学生が高座に上がり、知り合いに教えてもらったという小咄を披露した。2021 年度より「伝統話芸の世界」に春日丘中学の生徒が参加するようになったが、毎回生徒が高座に上がり、今回初めて大学生も上がった。このように積極的に取り組んでくれることは喜ばしいことである。

◆学生の感想

最後に、一部ではあるが、参加学生の主な感想を紹介する。

●**講談**:話し方でどのような話も面白くなることに気づいた。例えば、抑揚をつけたり、早口で話したりすることで聞き手の興味を引くことができると知った。／講談では、聞き手の目線を、見てほしいところへ誘導しているのが凄いと思った。講談では、色々と冗談めかしたりしつつも、八冠までの道のりをしっかりと解説しているということに気づき、さすがの腕前だと思った。／講談では、釈台を叩く音や大きな動作などに引き込まれて、楽しい時間を過ごすことができた。／盛り上がる場面では非常に早口なのにもかかわらず、間違えることがなく、1 音 1 音がはっきりと聞き取れる技術の高さに驚いた。／私は瀬戸に住んでいるが、藤井聡太さんに関して詳しく知らなかったため、講談を聞いて改めて自分の地元について理解が深まったり、新しく知ることがあったりし、よい経験となった。／永瀬拓矢さんとの対戦では、4 局のうちの 2 局が藤井聡太さんの大逆転勝利であったことを知って驚いた。大逆転の際の強弱をつけた話し方が、聴き手を引きつけるような話し方ですごいと思った。

●**落語**:落語では、まるで聞き手の私たちがその物語の中にいるかのように錯覚するほど、状況描写やキャラクターの行動の演技が素晴らしかった。／落語では、聴いていると、空腹を感じるほどに食べたり飲んだりする音の表現が巧みだった。／尾張落語は郷土愛がある人ではないとできないと感じた。登龍亭一門の弟子が少ないことに驚き、伝統文化の衰退を感じた。／伝統文化の存続に対して何ができるのかを考えさせられるよい機会だった。全く緊張した様子がなく、次から次へと言葉が出てくるところに落語家としての実力の高さを感じた。／最初はつまらないと思いながら聞いていたが、話が進むにつれて聞くことが楽しくなってきて、「次はどうなるんだろう」と最後まで聞きたくなっていた。／登龍亭獅篭さんが瀬戸の商店街の藤井聡太さんの似顔絵を書いた人であることを初めて知り、たいへん驚いた。／今までの芸術鑑賞会とは違った雰囲気で伝統を感じることができた。

４. 京文化と科学と芸術

講師　太田達（有職菓子御調進所 老松主人）

10 月 18 日（水）、不言実行館アクティブホールにおいて、太田達（とおる）氏による「京文化と科学と芸術」と題する講演会が開催された。応用生物学部と共催の企画である。当日は、応用生物学部食品栄養科学科と人文学部日本語日本文化学科を中心にした学生 89 名と教職員 11 名、外部から 1 名、併せて 101 名の参加者があった。

講師の太田先生は、立命館大学食マネジメント学部の特別招聘教授。併せて「有職菓子御調進所老松」主人（宮中儀式の食礼法に関わる老舗和菓子屋社長）で、かつ「太田宗達」を名乗り、年に 200 回もの茶席を営む超多忙な茶人でもある。また茶道点前のわざを三次元動作解析（モーションキャプチャ）でデータ化した研究で工学博士の学位を有する研究者でもある。その意味で、文化を科学の手法で解析する「文理融合」の体現者といってもよい。加えて、京都御所西の皆川淇園の旧学舎を「公益財団法人・有斐斎弘道館」と名づけ、そこを文化と研究の拠点として、マルチな文化活動を展開している。

講演は、「職業選択自由のない」家に生まれたご自分の生い立ちを語りながら、結局、料理や和菓子などの食文化が科学や芸術と分かちがたく深くつながっている、ということを、熱くかつ軽妙に語られ、聴衆を魅了した。「老松」では、和歌や古典を踏まえた和菓子を日々新たに創作しているとのことだが、そこにも、その伝統文化の教養の豊かさにもとづく京文化の奥深さを感じとることができた。

圧巻は、NHK テレビ放映の「希林の宴」の映像。それは、茶人太田宗達自らが主人を務めて客人（樹木希林ほか 2 名）をもてなす「茶事」の実例で、その舞台裏まで含めて記録されたビデオであった。茶事の当日の主題とそれにもとづく仕掛け（趣向）のかずかず（庭のしつらえ、掛け軸、料理の趣向、菓子、茶碗、等々）、およびそれをめぐって遣り取りされる主人と客人の高度に知的な会話など、まさに日本の伝統文化のエッセンスが濃密に凝縮して示されていた。総じて、日本の古典や芸能などの伝統文化にもとづく京文化が、科学と芸術と融合し身体化されているということを実感させる講演であった。

太田先生は、世界各地で、その地の特色を生

かした趣向のもとに、さまざまな「茶事」のパフォーマンスを続けておられる。その意味で、「茶事」に代表される日本の伝統文化が、創造的にしてかつ普遍的な意味を持つということを、実証されているのかもしれないと思われた。

◆学生の感想（コミュニケーション学科１年男子）

私のイメージは、京文化と芸術、京文化とお茶は結び付くのだが、お茶と芸術が結びつくことが理解できなかった。しかし、太田宗達さんのお話を聞くと、かなり昔から京文化があったことが分かった。お茶会における炊き立てご飯が、「あなたのために焚きました」という意味があると知ったとき、さすが日本の文化だなと思った。また、お茶会の席において、そのお茶会の料理のおいしさは、ご飯で決まるということだ。これは、日本といえば白米という文化が定着しているから、大事な席での料理のおいしさが、ごはんで決まるのも納得がいった。またそれと同時に、海外でのそういう場では、何を基準に、料理のおいしさが決まるのかという疑問もわいた。今回の講演会を通して、京文化と茶、芸術がつながっているということを学んだ。また、この３つがつながっているからこそ、いいお茶会ができると思った。（原文ママ）

◆学生の感想（コミュニケーション学科１年男子）

太田達氏が茶道の達人でありながら、工学博士でもあるところに驚き、同時に疑問に感じた。私は、茶道と工学がどのようなつながりがあるのか全く想像ができなかったからだ。この２つがどのような関係を持っているのかとても関心を持った。実際にお話を聞いてみて、太田達氏は京文化、日本の文化を科学の力でデータ化をするという研究をしていて庭園ある木々や石畳の高さにまでこだわって作られていることを知り、茶道と工学のつながりについて納得できた。また、このデータを活用して、現代に必要な、文化芸術による知を再生させるための、そして新たな日本文化研究・教育などさまざまな活動を行っていることが分かった。この活動は日本人に対してだけではなく、世界の人々も対象にしており、改めて驚嘆した。現代は超ネット社会と言われるほどにインターネットが普及している。私も太田達氏のようなことはできないが、インターネットを通して、今回の講演で学んだことや日本の伝統文化の魅力を少しでも多くの人に知ってもらうために世界に発信していきたいと思う。（原文ママ）

５. 江戸期の音楽

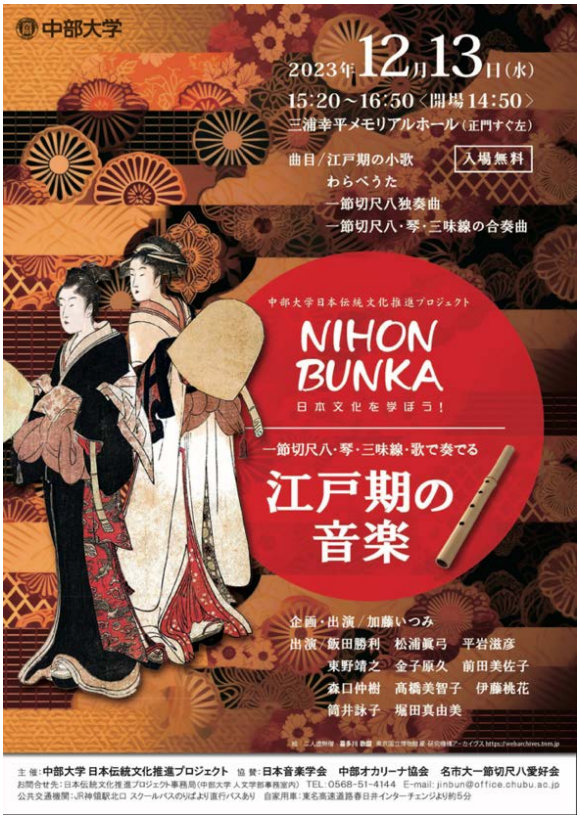
一節切尺八・琴・三味線・歌で奏でる

企画・出演　加藤いつみ

出演　飯田勝利・松浦眞弓・平岩滋彦・東野靖之・金子原久・前田美佐子・森口仲樹・高橋美智子・伊藤桃花・筒井詠子・堀田真由美

12 月 13 日（水）に三浦幸平メモリアルホールにおいて、名古屋市立大学名誉教授加藤いつみ氏と、名古屋市立大学一節切尺八愛好会のメンバー12 人、及び中部大学卒業生の伊藤桃花氏も加えたメンバーにより、琴と三味線を加えた合奏曲 9 曲が披露された。参加者は 263 名（内訳：学生 58 名、春日丘高校生徒 43 名、教職員 18 名、学外者 144 名）。

加藤いつみ氏は 2023 年 3 月に、中部大学大学院で一節切の歴史や音楽理論を研究して博士号を取得した。今回の演奏会は、この学位論文に基づき、室町時代から江戸時代初期に主に吹かれていた丈の短い尺八である一節切尺八の音楽を中心に演奏した。古くは一休禅師や後水尾院なども吹いていたとされるこの一節切は、江戸後期頃にはすっかりさびれてしまい、今ではほとんど吹く人も知る人も少ない楽器となっている。加藤いつみ氏はこの楽器の復興を願っており、本演奏会はその復興運動の一環となるものである。



６. 日本伝統文化講座

日本伝統文化講座では、春学期には全学共通教育科目の授業として「日本の歴史と文化」を開講し、秋学期には日本舞踊や能楽のシリーズでのお稽古を実施した。全学の学生にいろいろな分野で日本伝統文化の種を活かしてもらうための素材となることが期待される。

（１）春学期　授業「日本の歴史と文化」（座学）

春学期の講座は、日本舞踊の西川千雅家元、能楽の久田勘鷗師、茶道表千家今日庵の谷口剛久先生、及び本学顧問の辻本雅史先生を講師に迎えて、講義形式での授業を実施した。

（春学期）全学共通教育科目「日本の歴史と文化」

テーマ	講師	実施日
ガイダンス	井上徳之・岡本聡	4/7
能楽	久田勘鷗	5/12、6/2、6/30
日本舞踊	西川千雅	5/26、6/16、7/7
茶道	谷口剛久	4/28、5/19、6/9
俳諧	樗木宏成（岡本聡）	4/14、4/21
伝統的教育	辻本雅史	6/23

（２）秋学期　授業「SDGs プロジェクト科目」（お稽古）

秋学期の講座は、「クロスオーバーSDGs プロジェクトＡ」を絡めて授業を行った。能楽と日本舞踊のシリーズ授業があり、学生はお稽古の形で能楽や日本舞踊の体験をすることができた。能楽は、久田三津子先生、梅若紀佳先生を講師として３回シリーズの講座が実施された。また、日本舞踊は、西川まさ子先生を講師として４回シリーズの講座が実施された。

（秋学期）能楽・日本舞踊のお稽古

テーマ	講師	実施日
能楽	久田三津子、梅若紀佳	10/20、11/10、11/17
日本舞踊	西川まさ子、西川豊代乃	9/29、10/27、11/24、1/19

（３）伝統文化講座の学生感想

◆学生の感想（経営総合学科２年男子）

日本の歴史と文化の授業で印象に残っている授業の内の一つが茶道と生け花です。これまでにテレビ番組などで何度か実際に茶道や生け花をする様子は見たことがありましたが、茶の間のお話やその道具や飾りの意味や背景などを知ることでより奥深く面白さがわ

かるような気がしました。“茶の間”というだけで作法の流派や所作、飾りなどの空間やお茶菓子などいろんなおもてなしの方法があり、文化としての良さを感じました。

能楽についても印象に残っています。授業でお見せいただいたビデオからも迫力を感じましたが、やはり先生が実際にうたわれた時の迫力がとても素晴らしかったです。鳥肌が立ちました。能のお面や衣装などの道具にも様々な意味合いがあり、道具としての表現も面白いと感じました。鏡板なども昔は松を神様としていたことから松の前で能をしており、それが鏡板となったという背景も面白さを感じました。また、実際のお稽古の様子を口頭で聞いたときはとても驚きました。本番中は長時間、台本もなく動き一つ一つや歌やセリフ一つ一つをすべて覚えているという事実に驚きました。またはやしの人たちも含めて全員の息がとてもあっているというように感じました。これまでにどれほどのお稽古を重ねてきたのかが気になりました。

日本の歴史と文化の授業では実際に日本の歴史と文化に触れることができてとても良い経験になりました。これから世界はどんどんイノベーションによるテクノロジーが高まっていくような気がしますが、日本の文化のように美しいものはこの先ずっと守られて行ってほしいと感じました。そして現代の日本人も含めてより多くの世界中の人々に日本の文化や日本人の良さが伝わってほしいと心から感じました。(原文ママ)

◆学生感想(食品栄養学科　２年男子)

茶道の講義について。始めに講師の先生に外国人の方が日本の文化について詳しいと言われ、確かに茶道に限らず名前は知っていても具体的な内容や大まかな決まり事すらも我々は伝統文化について知らないと気付かされた。茶道というと厳かな部屋で正座をして静かにただ抹茶を飲むのというイメージであったが、そこにはお茶を飲みに来てくれた人へのおもてなしの心が詰まっていることを学んだ。また、「所作の美」、「茶道具の美」、「空間の美」といった、茶道具の使いやすさや、お茶の味だけでなく茶碗、部屋に飾る花、お客様に出す茶菓子など、季節や行事にちなんだ物や相手を楽しませる工夫などがされており、今までの暗いイメージとは違い、四季折々のもので相手をもてなす、とても暖かい空間であった。(原文ママ)

７. 共催・協力事業、伝統文化関連イベント

（1）源氏物語屏風の講座　中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC）

講師　高橋　亨

9 月 29 日（金）、10 月 6 日（金）に名古屋大学名誉教授の高橋亨先生により、本学所蔵の 2 点の源氏物語屏風について講座を行っていただいた。9 月 29 日には源氏物語屏風　六曲一双の小屏風（江戸時代中期、無銘）の説明の他、そこから派生した源氏物語全般の中での絵の位置づけなどについて、また 10 月 6 日には、土佐光貞筆の源氏物語銀地屏風大屏風、六曲一双（江戸時代後期）の説明をしていただいた。海外での源氏物語展の話や、猫が源氏物語の時代は帝のごく周辺でしか飼う事ができなかった唐から輸入されたばかりの貴重な生き物だった事など多くの屏風絵から派生した話をしていただき、受講生の方々も大変興味深く話に聞き入っておられた。

（２）草木染め ワークショップ

講師　矢野美代子、協力　悠遊会

11 月 8 日（水）に、現代教育学科理科実験室（71 号館 2 階）と、70 号館西側外壁の手洗い場において、悠遊会による草木染め講習会を開催した。参加者は、学生が日本語日本文化学科 11 名、現代教育学部 3 名、教員 3 名（高木徹教授、千田隆弘講師、永田典子教授）であった。

悠遊会は、グリーンピア春日井などで草木染め体験会を開催するなどの活動をされている市民団体である。今回は、草木染めのなかでもインド藍を用いた藍染めを指導してくださった。まず、理科実験室において、悠遊会のメンバーが各学生の補助につき、模様づけの絞り方を指導した。白いハンカチに独自の絞りができると手洗い場に移動し、一連の染色作業を行った。できた作品は、悠遊会がアイロンで乾かしてくださったので、そのまま持ち帰ることができた。学生たちが楽しそうに作品を見せ合っていた光景が印象的であった。

（３）着付け講座（日本語日本文化学科）

講師　中島恵美子･太田明子

日本語日本文化学科は、日本伝統文化プロジェクト室において、春学期に浴衣の着付け講座を 5 回、秋学期に着物の着付け講座を 7 回開催した。講師の中島氏は、春日井市の市民団体「きもの・日本文化を伝える会 つるさん 亀さん」の代表であり、太田氏はそのメンバーである。浴衣の着付けは簡単なため、春学期の受講はひとりにつき 1 回とし、18 名が参加した。そのうち 1 名は男子学生、2 名は中国からの女子留学生であった。着物の着付けを覚えるには時間がかかるため、秋学期の受講者はひとりにつき 5 回とし、6 名の女子学生が参加した。しかし、開催日時が大学行事と重なることがあり、やむを得ず欠席する学生がいたため、中島氏、太田氏のご厚意により、補講を 2 回行った。着物は学科が保管しているものを貸し出したが、サイズが身体に合わない学生もいたため、両氏が手持ちの着物を貸してくださり、学生たちは、いろいろな着物が着られると喜んでいた。

（４）チャンバラ合戦（全学学科対抗スポーツ大会）

第 21 回中部大学全学学科対抗スポーツ大会が、6 月 14 日（水）に開催された。この大会の日本伝統文化にちなんだ競技に「チャンバラ合戦」がある。幟や陣羽織姿を採用しており、参加者の興趣をそそるイベントとなっている。本競技の優勝は、保健看護学科であった。

（５）現代教育学部「学内連携推進委員会」（伝統文化の教育）

現代教育学部では、学内連携推進委員会（委員長：千田 隆弘）が日本伝統文化推進プロジェクトとも連携して伝統や文化に関する取組みを実施している。新しい学習指導要領・幼稚園教育要領等の主な改善事項に「伝統や文化に関する教育の充実」が示されている。

１）七夕に因んだ伝統文化授業

7 月 6 日（木）と 13 日（木）に幼児教育学科 1 年生が授業「環境と生活」で七夕に因んだ伝統文化を学んだ。伝統文化や科学的な見方・考え方の芽生えを培う教育は、幼稚園教育要領にも示されている。七夕会のチームに分かれた学生が、コマやカルタなどの伝承玩具について、伝統文化と STEAM 教育の視点で調べたことを学び合うコーナーを設置した。浴衣の着用体験や、伝統工芸士の加藤高明氏から学んだ「貝合わせ」づくりなどで日本の夏を感じさせる会場をつくり活動を展開した。

2）雛人形ワークショップ

11 月 9 日（木）に 71 号館多目的実習室で、伝統工芸士の加藤高明氏を講師として「ボトル立ち雛」を製作した。対象は幼児教育学科 1 年生で、「保育内容指導（環境）」受講者がペットボトルに本物の雛人形用の着物を着せて、学生ごとにオリジナルの雛人形を完成させた。本活動では、雛人形が子どもを災厄から守る存在であることや、雛祭・日本の伝統的な装束についての説明を受け、伝統文化への興味と理解を深めた。加藤高明氏の作品も展示され、学生の質問にも丁寧に答えていただいていた。

3）着物の着付け体験(現代教育学部)

1 月 22 日（月）と 25 日（木）に学内連携推進委員会が主催した「着付け体験会」が洞雲亭で行われ、現代教育学部の学生 28 名が参加した。女子学生に加えて、今回は男子学生にも着物を着る機会を設けた。学生たちは、きものサロン東京堂のサポートで着付けを体験し、着物姿で記念撮影をしたり、カルタなどの遊びをしたりしても楽しんだ。参加学生からは「TPO によって帯の結び方を変えられ、多様なアレンジができることを知った」や、「貴重な体験ができてよかった」といった感想が寄せられた。

【活動の発展】

日本伝統文化に関わる活動から様々な発展が見られている。現代教育学部のオープンキャンパスでは、来場した高校生に着物姿の学生が対応して対話を深めていた。現代教育学部の着付け教室では、日本伝統文化プロジェクトの「着物の着付け教室」を修了した人文学部の学生がサポーターとして参加し、着付けを手伝う姿が見られた。また、恵那市の「飯地高原納涼夏祭り」に幼児教育学科から出展があり、伝統玩具を含む展示体験コーナーが多くの親子連れに人気を博した。

（６）日本伝統文化プロジェクト室の活用

日本伝統文化プロジェクト室（不言実行館５階）の活用について、展示スペースと和室スペースの利用について、2023 年度の活動を紹介する。通常の伝統文化に関わる資料展示に加えて、学生作品の紹介、取材会場、活動成果の発表の場として活用されている。

１） 雛祭の遊び道具など、学生作品を展示（現代教育学部）

雛祭の遊び道具である「貝合わせ」などを学生が制作し、日本伝統文化プロジェクト室に展示した。幼児教育学科１年生の授業「環境と生活」で、伝統工芸士の加藤高明氏を招いたワークショップで制作したもので、学生はハマグリに和柄シール等で装飾を施して作品を完成させ、個性溢れる色とりどりの作品が、加藤高明氏の雛人形とともに展示された。現代教育学部「学内連携推進委員会」（伝統文化の教育）の展示期間は次のとおりである。

① 7 月 6 日（木）
　伝統文化に触れよう　～玩具と着物～
② 7 月 13 日（木）～8 月 17 日（木）
　学生製作「貝合わせ」と、伝統工芸士　加藤高明氏の雛人形
③ 11 月 9 日（木）～ 12 月 7 日（木）
　学生製作「ボトル立ち雛」と、伝統工芸士　加藤高明氏の雛人形

２） 伝統文化に関わる学生活動の取材（放送研究会）

日本伝統文化プロジェクト室を使用して、伝統文化に関わる学生活動について放送研究会の取材があった（10 月 6 日）。学生が主体的に取り組む伝統文化活動の紹介で、活動の一部は「ちゅとラボ」にも採択されている。取材では、連句のルールや作品解釈をアニメーション映像にまとめる活動に取り組んだ伊集盛礼（日本語日本文化学科４年）、阿部健心（同１年）、百武孔（同１年）が、参加動機や活動での学びについて語った。

また、次世代研究者挑戦的研究プログラムに採択された樗木宏成（国際人間学研究科博士後期課程）は古典教育にデジタル技術を取り入れる取り組みを紹介した。取材内容はキャンパス情報番組に編集され、放送研究会が学内の人文学部スタジオ施設から生放送でインターネット発信された。同番組は、春日井市のケーブルテレビでも放送されている。

3） 学生活動の成果発表 「伝統玩具」展示会

2023 年度　夢・チャレンジ『ちゅとラボ』に採択された学生グループが、伝統玩具展示イベント「これってどう遊ぶ？」を２月 19 日（月）から３月 15 日（金）まで、日本伝統文化プロジェクト室で開催した。学生グループは、東濃地域の地歌舞伎の見学をきっかけに、伝統文化に関わる「地域社会と連携した事業」で社会貢献できないかと考えて活動しており、美濃歌舞伎が盛んな東濃（特に、恵那キャンパスのある恵那市）で、人の集まる観光イベント（地域の夏祭り）に参加しており、今後の出展コンテンツとして「伝統玩具」の調査研究を行い、その成果を展示会で発表した。展示ごとの説明パネルには、わかりやすい解説を記載して来場者の興味を深めた。また、期間中の３月６日（水）には、サテライト企画として中部大学春日丘高校の生徒を招いて伝統玩具の体験会を開催した。大学生の指導を受けて、で初めて体験する伝統玩具に夢中になる高校生の姿が見られた。

（7）中部大学春日丘中学校「江戸時代の連句を巻こう」（中大連携）

併設校の中部大学春日丘中学校との連携活動として、中大連携を実施した。この活動には生徒が伝統文化に触れる機会があり、江戸時代の連想ゲーム「連句」について、岡本聡教授が Teaching Assistant（TA）の学生と共に指導した。7 月 7 日（金）実施の事前授業では、日本語日本文化学科の有志学生が制作した連句の解説動画を利用し、本学大学院生の樗木宏成氏が授業を行なった。

8 月 22 日（火）～24 日（木）に洞雲亭（和室）で実施した本活動では、連句の実作や茶道体験、俳句カルタ（有志学生の制作）によるレクリエーションを催した。今回実作したのは 24 句で 1 作品の形式をとる「短歌行」で、生徒たちは少人数のグループで取り組んだ。中には連想に行き詰まる生徒の姿もあったが、その際は TA のサポートや、友人同士による教え合いを通して課題を乗り越え、全グループが短歌行を完成させることができた。生徒たちの感想には「連句の作成を“巻く”というのは知らなかった」という発見や、日常ではできない貴重な体験を喜ぶ声、和気藹々とした交流が楽しかったことなどが記されていた。

学びの成果は、中学校の啓明祭（9 月 16 日開催）で発表された。

（８）学生による伝統文化に関わる活動

2023 年度　夢・チャレンジ『ちゅとラボ』など、多様な展開

学生達は、日本伝統推進プロジェクトのイベントに参加するだけでなく、受付や司会などを担当しており、さらに自律的な学生活動も実施している。2023 年度「ちゅとラボ」に採択された学生チームもあり、多様な方法で伝統文化に関わる学生活動が行われている。

1）伝統文化に関わる教材・イベントツールの開発

①アニメーション制作（VYOND）：江戸時代の連想ゲーム（連句）を解説した動画を制作した。学生が古典の解釈を深めながら制作した。

②俳句カルタ:東濃に関連する俳句を集めてカルタを制作した。季語や地域文化を学べるように工夫した

③伝統玩具:伝統玩具に関する調査研究を行い、学外イベントで展示会や体験会を実施するためのツールとして揃えた。この成果をまとめて、日本伝統文化プロジェクト室で展示会を行った（２月～３月）。

2）学外との連携活動

①恵那市の夏祭りイベントに出展:「飯地高原納涼夏祭り」（8 月 14 日）に出展し、制作した動画や俳句カルタを用いた体験コーナーを出展した。中部大学天文台や幼児教育学科も参加しており、来場者とともにお互いの展示を体験して交流を深めた。

②中大連携・高大連携：中部大学春日丘中学校との中大連携において、「連句」テーマのシリーズ授業に学生が参加し、学生制作の動画・俳句カルタや茶道の体験活動を実施した。その成果発表となる啓明祭（文化祭）の生徒出展に、動画や俳句カルタを貸し出した。また、伝統玩具の展示会の内容で中部大学春日丘高校の生徒に体験会を実施した。

8. プロジェクトメンバー

プロジェクト長	辻本　雅史（顧問）
生命健康科学部スポーツ保健医療学科	伊藤　守弘（学生部長・教授）
理工学部AIロボティクス学科	高丸　尚教（教授）
人文学部日本語日本文化学科	永田　典子（教授）
人文学部日本語日本文化学科	岡本　聡　（教授）
人文学部日本語日本文化学科	越川　次郎（教授）
超伝導・持続可能ｴﾈﾙｷﾞｰ研究ｾﾝﾀｰ	井上　徳之（教授）
事務統括本部長	垣立　昌寛
学事部次長	永平　三喜
人文学部事務室事務長	松田　博行
（プロジェクト庶務）	人文学部事務室

オブザーバー参加学生

大学院国際人間学研究科 言語文化専攻 博士後期課程　２年	樗木　宏成
人文学部 日本語日本文化学科 ４年	伊集　盛礼
経営情報学部 経営総合学科　３年	長友　淳哉

編集後記・謝辞

日本伝統文化推進プロジェクト 2023 年度活動報告書の作成にあたり、活動にご尽力いただきました多くの皆様に深く感謝いたします。主催イベントに加えて、協力事業や伝統文化関連イベントも広がり、学生の主体的な活動も展開されるようになりました。報告書の作成にあたりましては、学園広報部制作課にイベントごとのチラシ制作や写真・記録の提供にご協力いただきました。また、放送研究会メンバーの皆様にはイベントを取材いただき、動画や記録の提供にご協力いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

日本伝統文化推進プロジェクト 2023 年度活動報告書
編集・発行　中部大学日本伝統文化推進プロジェクト
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地
中部大学　人文学部事務室
TEL 0568-51-4144